

暮らしの中の生きものたち

鶯

このコーナーでは身近でなじみ深い生きものたちを紹介しています

鶯（ウソ）は、春の季語になっています。季語の成立は平安時代に遡るといわれ、古来、その明るいピンク色の目立つ姿で新芽や蕾などに集まる様子がなじまれていたことが伝わってきます。けれども、じつは、平安京の地・京都では冬鳥で、繁殖の記録はないとされます。繁殖地は本州の標高の高いところや北海道の針葉樹林帯、春が本格化した頃には、もう旅立っていることでしょう。



コナラの梢で新芽を食べるウソ 2021.3.6

年によって京都への渡来数は異なるようで、この一帯でも毎年必ず出合える鳥ではありません。3月に高いコナラに姿を確認できたときは、冬の間何度か耳にした口笛のような声がやっぱりウソで、嘘じゃなかったと嬉しくなりました。

蒴果を房状にぶら下げているリョウブ近くで声をきくことが多いのは好物がそのタネだからと知るにつけ、運ばれて離れたところでも芽生えがたくさん育つ様子に「ウソでしょう？」…、また、雪が積もった年など、しんとした森に響き渡る口笛の美しさに「ウソでしょう？」…。

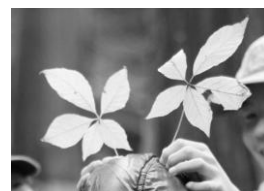
鶯が嘘と同じ音なのは、昔、口笛を吹くことを「嘯く」と言ったためです。鎌倉時代の『名語記』に、「小鳥の名に、うそ如何」という件があり、「口にてふくうそにかの鳥のなく音のあひにたれば」と書かれています。また、西行法師の『山家集』に、「桃園の花にまがへる 照鶯の 群れ立つをりは 散る心地する」という句もあります（『鳥のいる風景』高橋達明 参照）。

たくさん飛来すると、ウメの産地では蕾が食べられ生産に影響が出ると有害鳥獣駆除の対象にされたり、観光地では桜が咲かなくなると鷹匠に依頼して追い払いが行われたり。一方で、食べられることで適度に調整されて、むしろ桜のコンディションが良くなるという意見もあると教わりました。



大宰府天満宮の木鸞木をくると削る道具は各地で異なり、太宰府の木鸞はノミ、山形のお鷹ポッポはナタ、アイヌのイナウは小刀(イナウケマキリ)が使われるという

大宰府では、鶯の字が学の旧字・學に似ている、ハチの襲来にそれを食べると信じられていたウソを蜂除け・災難除けにしたなどの所以で、木鸞が作られるようになったといわれます。そして、災いを嘘に替えて新年の福を願い、一年間の嘘を移し替えて誠を持ち帰る「鶯替え神事」も、各地の天満宮に受け継がれています。木鸞はその依代でもあるのです。大宰府では江戸時代からの変遷も記録に残され、コシアブラで彫られるためその確保に向けた保全活動も展開されているとか。冷温帯林に見られる落葉樹のコシアブラ、「観察の森」でも大切に見守りたい樹種です。



コシアブラの落ち葉で遊ぶ



その新芽 2021.3.27

以前、森のセンターを訪問されたスウェーデンの方から、この鳥が好きなので、とおなかまで赤いウソの絵をいただきました。旧北区で亜種が10種にも及ぶウソは世界各地で愛されている鳥なのでしょう。日本では、少し前の130円切手にのどが薄紅色のウソが描かれていました。



北欧のウソ



平成切手130円

口笛が出るほど朗かに、春を過ごしてきたいものです。

§

寒い冬、暖かな春

この冬、久しぶりに京の底冷えを感じました。1月の森の子クラブでは氷や霜柱に子どもたちも大興奮、2月には滝も凍るほどの日がありました。

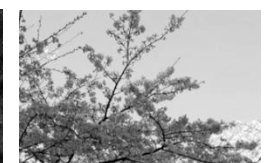
そのおかげか、低い気温を経なければ咲かない桜が、暖かな早春以降の開花を促す気温も重なって、早々と3月中に満開を迎えました。4月、もうカエデの花が咲いています。



1/10 大きな霜柱



賛助会員の方が
楼門の滝の水瀑の写真を
届けて下さいました
2/18に撮影



3/26 センター前の桜



4/3 総門前の楓